

南
遊
志

南

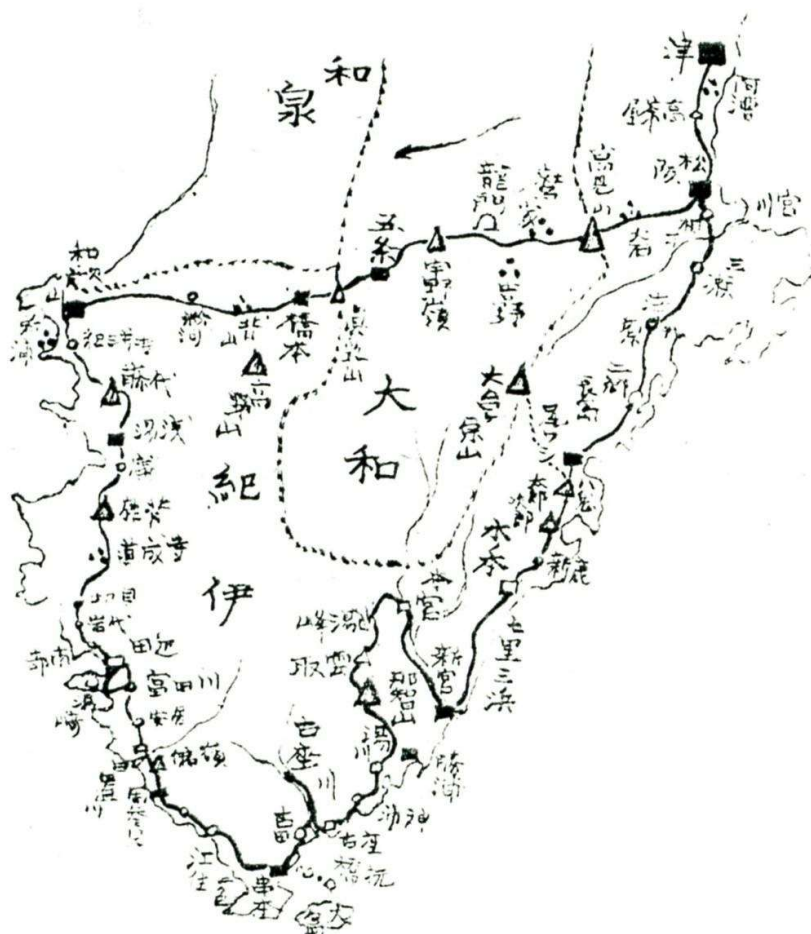
遊

志

齋藤拙堂先生略傳

先生は伊勢の藩士、名は正謙まさかね、字有格又拙堂鐵研と云ふ、初め古賀精理に業を受け、刻苦勉勵大に進むだ爲に擢でられて、藩の学識となり、後碌百五十石を受け、文政七（一八二四）年十二月上士に進み、侍講を兼ね碌二百石となり名聲愈々揚つた、天保十二（一八四一）年郡宰に擧げられ、力めて文庫の増設、良典の刊行、文武兩道の推奨、人材の登用など治績大に上つた、當時幕府は其令名を慕ふて拙堂を辟いたが「藩侯の恩命を棄つるは士人の恥辱だ」といつて固辭して受けず儒臣を拝命した拙堂の清廉と學殖は此時から一層有志の欽慕する所となつた、安政六（一八五九）年引退したので藩は食碌十五俵を給し長子正格に三百石を與へた、慶應元（一八六〇）年三月偶々隔體を患ひ七月遂に永久に眠つた時に年六十九才、先生の文獻は夙に顯はれ彼の有名な木曾川を下るの記及月ヶ瀬勝記ば其詩想の豊富を語るものである、南遊志は先生の紀勢紀行で其他拙堂文話、同續月ヶ瀬勝記、海外異傳、鐵研餘論、露西亞外記、京華遊録等の著がある（大正十一年十一月梅村記）

【拙堂先生南遊記行略圖】



四天王寺（津市）



齋藤拙堂像



南遊志

余夙聞熊野之勝、魂飛神逝者久矣、十餘年前紀府小浦來青、以郡官來住松阪、以文字納交於余、郵筒往來殆無虛月、及昇遷歸本府、數寄書勸余南遊、余欲往從之、道阻且遠、又有疾病事故礙之、久之不能決焉

今茲庚申春初、又有書來促、余感其意、及決計戒門生岡崎靖共

上筑之秋月人畫僧雲樵已後發伊賀人勢之龜及一奴、欲以

三月四日朝發津、至雲津、送者十餘人、門人松浦道壽邀入其家、憩飲、晚趨松阪、松阪吏目龜井有常、亦爲舊門生、約此行爲嚮導、遣其子才太郎迎於途、有常亦繼至、導上環翠亭宿焉、憶余嘗導我藩郡宰戸波宗親等、會來青於此亭、欸留竟日、結隣邦之好、當時余賦一律紀所遇、書以與主

（読み下し文）

余夙に熊野の勝を聞き、魂飛び神逝く者久し、十餘年前、紀府小浦來青、郡官を以つて松阪に來り住し文字を以て交を余に納れ、郵筒往來殆んど虚月無し昇遷して本府に歸るに及び數書を寄せて余に南遊を勸む、余往いて之に従はんと欲するも、道阻にして且遠し又疾病事故の之を礙くる有り、之を久しうして決する能はざりき

今茲に萬延元（一八六〇）年庚申春初、又書來りて促す有り、余其の意に感じ乃ち計を決し、門生岡崎靖共、神吉匪躬、畫僧雲樵及び一奴を戒め、上三月三日巳の後を以つて發出發せんと欲す

三月四日朝津を發し、雲津に至る、送る者十餘人、松浦道壽其家に邀へ入る、憩ひて飲む、晚れて松阪に趨く、松阪の吏目、龜井有常、亦舊門生爲り、此行嚮導と爲るを約す、其子を遣して途に迎へしむ、有常も亦繼いで至る、導かれて環翠亭に上り宿す、憶ふに余嘗て我藩の郡宰戸波宗親等を導きて、來青等と此亭に會し、欸留日を竟

人、裝飾爲幅掲在壁間、屈指已九年矣

五日赴夏目源次郎 郡宰之宴嚮者來青之將歸、

與田丸郡宰淺板某仁左衛門 來修前好、宗親等

邀之設宴於烏洲酒樓、余亦往會之、後夏

目代來青任松阪郡宰、瀧本某源三郎 來會宗

親等於烏洲、又修前好、余又與焉、今日招飲善隣之誼益厚

六日早發松阪、過大河内、路傍有一大邸、爲北畠氏舊墟、嘗登游記之至大石飯の器字 旅

亭、屋後有魚獄、獄中之魚、皆網前溪所

獲、けんぐう噉啣浮出、擇取其大者

宇具比漢名
桃花魚

割以爲炙、鮮美可口、夜宿七日市

七日踰高見嶺、嶺界勢和、神武帝之東征、

向孔舍衙阪今爲暗峠 軍不利、乃轉經紀國、向

伊勢由此嶺入大和按孔舍衙之敗、帝以爲我日神裔、不可日向征、當背日

へ、隣邦の好を結べり、當時余一律を賦して所遇を記し、書を以て主人に與へしが裝飾して幅と爲し、掲げて壁間に在り、指を屈すれば已に九年になり

五日、夏目郡宰の宴に赴く、嚮に來青の將に歸らんとするや、田丸の郡宰淺板某來りて前好を修め、宗親等を邀へて宴を烏洲の酒樓に設け余亦往いて之に會せり、後に夏目、來青に代りて松阪郡宰に任ぜらるゝや、白子郡宰瀧本某と來りて宗親等を烏洲に會し、又前好を修め余又與れり、今日飲に招かれ善隣の誼み益厚し

六日、早く松阪を發し大河内を過ぐ、路傍に一大邸あり、北畠氏の舊墟爲り、飯の器字嘗て登游して之を記せり、大石に至り、午飯の器字 旅亭後、けんぐう魚獄獄中の魚は皆網前溪に網して得る所、けんぐう噉啣として浮び出づ、其大なる者を選び取り割きて以つて炙と爲せば鮮美口にす可し夜七日市に宿す

七日高見嶺を踰ゆ、嶺は勢和を界す、神武帝の東征して、孔舍衙阪に向ふや、軍利あらざ、乃ち轉じて紀國を経て伊勢に向ひ、此嶺に由りて大和に入り、撃ちて八十梟師を國見丘に破り、遂に兄磯城、長髓彦を誅

戰、轉經泉紀、得八咫鳥導、向伊勢、故御中製有神風伊勢之語、或以爲由熊野入吉野非本居氏古事記傳、擊破八十梟師於國見丘、遂誅兄之說可從、磯城、長髓彦、奠都中土、是嶺寔爲皇業創基之地、撫古慨然、晚宿鷺家驛

八日過龍門村、盛衰記所載源義朝妾常盤、携三兒、逃難奔投龍門里、即此

一本に聞
龍門瀑布

在村南八丁余以爲此行將觀那智瀑如此等恐難爲瀑乎不肯往觀有常雲樵則往還言尋常飛泉耳

上市豪商藤田氏喜兵衛聞余游涉遣其人來迎

主人子某、嘗訪余津城、聞余有南游之志、請便道過訪余許之、乃至不見某、問之主人垂淚言、兒待先生久、客冬俄得疾下世、余聞之潛然、歎人世無常、某母及婦、見余絮語、如舊相識、遂延余及從侶於樓上饗之、樓甚華潔臨芳野川、綠淨拭目俛飲以雨、鱒、甚美、小雅所云嘉魚、杜詩所云丙穴魚、並謂此魚也、此魚爲芳野名產、他邦多不產、但諸州溪澗中、或產雨子幾甸謂雨

子關東謂也未免亦爲佳品、亞嘉魚、故漢名曰似嘉魚樓舊無名、主人請余命之、余以其面脊

し、都を中土に奠む、是嶺は寔に皇業創基の地爲り、古を撫して慨然たり晩れて鷺家の驛に宿す

八日龍門村を過ぐ、盛衰記載する所、源義朝の妾常盤、三兒を携へて難を逃れ奔りて龍門の里に投ずとは即ち此なり、上市の豪商藤田氏余の游涉を聞き、其人を遣して來り迎へしむ、主人の子某は嘗て余を津の城に訪ひ、余が南遊の志有るを聞き道を便して過訪せんことを請ひ、余之を許せり、至るに及んで某を見ず、之を問へば、主人涙を垂れて言ふ兒の先生を待つや久しかりき、客冬俄に疾を得て下世せりと、余之を聞きて潛然、人生の無常を歎ず、某の母及婦、余を見て絮語すること、舊相識の如し、遂に余及び從侶を樓上に延きて之を饗す、樓は甚だ華潔、芳野川に臨み、綠淨くして目を拭ふ、飲を俛むるに雨鱒を以てす、甚だ美なり、小雅云ふ所の嘉魚、杜詩云ふ所の丙穴魚は並に此魚を謂ふなり、此魚芳野の名産爲り、他邦多く産せず但諸州溪澗の中、或は雨子を産す、亦佳品爲り、嘉魚に亞ぐ、山故に漢名を似嘉魚と曰ふ、樓は舊名無し、

負妹山、命曰鳳凰樓、書扁與之

九日朝^{あした}辭藤田氏、經六田諸村上字野嶺、見和中諸山於雲烟間、並爲舊游跡、爲從侶一指點抵五條、人烟稠密、代官行館在焉、過眞乳山山下一川爲和紀之界、宿橋本驛

十日買舟下紀川、即爲芳野川下流、行望高野山、雨後如蒼翠如沐數里過一島、多豫章、是爲舟岡山、左右岸上兩岡隔水對峙、實爲妹脊山、上市及和歌浦並又有妹脊山、蓋妹脊爲夫婦之義故古人或遇兩山對峙者、輒被以之名敷、但古歌咏屬此地、萬葉可徵、又行一餉時既而望見麗譙於雲間、是爲和歌府城、猶相距里許府下倉田伯成^{朔太}嘗遊學於吾津此日以來青之命來迎共坐舟而下、經數橋、抵城門下、上岸、即爲本町、宿於逆旅即夜來青拉松平春峰太郎來見飲至夜半、約明日招飲而去

主人余に之を命ぜんことを請ふ、余其背山に面し妹山を負うを以て、命じて鳳凰樓と曰ひ、扁を書して之を與ふ

九日朝に藤田氏を辭し、六田諸村を経て宇野嶺に登り和中の諸山を雲烟の間に見る、並に舊游の跡爲り、從侶の爲めに一指點す、五條に抵れば人烟稠密、大官の行館在り、眞乳山を過ぐ、山下の一川は紀和の界を爲す、橋本驛に宿す

十日舟を買ひて紀の川を下る、即ち芳野川の下流爲り行く、高野山を望む、雨後の蒼翠沐するが如し、數里にして一島を過ぐ、豫章多し、是を舟岡山と爲す、左右の岸上、兩岡水を隔てゝ對峙す、實に妹背山と爲す、上市及和歌浦、並に又妹背山あり、蓋し妹背は夫婦の義と爲す、故に故人或は兩山の對峙する者に遇へば、輒ち被らするに此名を以つてするか、但古歌咏する所は此地に屬す、萬葉集徵す可し、又行くこと一餉時、麗譙を雲間に望見す、是れ和歌府城と爲す、猶相距こと里許りなり、府下の倉田伯成は嘗て吾が津に遊學せり、此日來青の命を以て來り迎ふ、共に舟に坐して下る、數橋を経て城門の下に抵り、岸に上る、即ち本町と爲す逆旅^{げきりよ}(宿屋)に宿す、即夜來青松平春

十一日、赴小浦氏の約、庭中櫻花欄開、掩映池水猶如鏡中美人艷麗無比、共坐幄亭賞之、相會者松平魯峰九郎左衛門以下數人、歡飲至晚、移坐堂上醉筆揮（揮筆瀉墨の略）、雲烟坐、魯峰爲春峰之父、嘗任勢州奉行、寓松阪、今爲寺社奉行、歸住本府

十二日余患腹瀉在寓消息、嚮踰高見嶺、山中有雪、寒甚、覺腹痛、至今不全痊、飲、醫士鈴木某貞輔藥、此日從者請往觀和歌浦許之、賴子成嘗爲余談天下名勝、言和歌浦雖有明光之稱平平不足觀、且余聞本地人說、明光之勝、從紀三井寺望見爲佳、近日南行、將經三井、故余不恨飲今日之游也

十三日、魯峰招飲、余病稍減乃與來青赴之、會者數人、皆文苑之士、亦爲雅集

峯を拉して來り見へ、飲んで夜半に至り、明日の招飲を約して去る

十一日小浦氏の約に赴く、庭中櫻花欄開、池水に掩映して猶鏡中の美人の如く、艷麗比無し、共に幄亭に坐して之を賞す、相會する者、松平魯峰以下數人、歡飲して晚に至る、坐を堂上に移し、醉筆揮瀉すれば、雲烟坐に滿つ、魯峰は春峯の父爲り、嘗て勢洲奉行に任ぜられて、松阪に寓せり、今寺社奉行と爲りて、歸りて本府に住す

十二日、余腹瀉を患ひ、寓に在りて消息す、嚮に高見嶺を踰ゆるや、山中雪有り、寒さ甚しく、腹痛を覺へしが今に至るも全くは痊へず、醫士鈴木某の藥を飲む、此日從者往きて和歌浦を觀ん事を請ふ、之を許す、賴子成、嘗て余の爲に天下の名勝を談じて、和歌浦は明光の稱有りと雖も、平々觀るに足らずと言へり、且余本地の人の説を聞くに、明光の勝は紀三井寺より望見するを佳と爲すと、近日南行して將に三井を経んとす、故に余は今日の游を飲むを恨みざるなり

十三日魯峯の飲に招く、余の病稍減ず、乃ち來青と與に之に赴く、會する者數人、皆

文苑の士、亦雅集爲り

十四日、夜詣小浦氏に詣る、度支大橋某來る、亦嘗て伊勢に在りて、白子郡の宰爲り、與に經濟事務を談じて夜半に至る

十四日、夜詣小浦氏、渡支大橋某忠右衛門來、亦嘗て伊勢、爲白子郡宰、與談經濟事務、至夜半

十五日、丹州久野大夫求見、從來青詣其邸、大夫以伊勢田丸城主、食一萬五千石、遣其臣隸代治焉、身在本府執事、篤好文學、施之有政、鬱然爲一國之望、紀之爲故國、非有大臣之謂也耶、大夫命設宴於茶寮、見請、酒美茶香、飲喫至半夜辞去、此夜月明、與來青吟步街上、抵寓

十五日丹州大夫見えん事を求む、來青に従ひて某邸に詣る、大夫は伊勢田丸の城主を以つて一萬五千石を食む、其臣隸を遣して代りて治めしめ身は本府にありて事を執る、篤く文學を好みて、之を有政に施し鬱然一國の望爲り、紀の故國爲るは、大臣有るの謂に非ざるか、大夫命じて宴を茶寮に設け請うぜらる酒美に茶香ばし、飲喫半夜に至りて辞去す、此夜月明、來青と街上を吟歩して寓に抵る

十六日、將以明早辞府下、來青、及向笠三之忠右衛門大橋川井藏藺田郎彦太等、凡十餘人、來辞、本府之士大抵爲新識但淺板郡宰爲舊相識、遇其病不得相見、爲可恨也

十六日將に明早を以て府下を辭せんとなす、來青及向笠、大橋、川井、藺田等、凡十餘人、來り辭す、本府の士は大抵新識爲るも、但淺板郡宰は舊相識爲り、其病むに遭ひて、相見るを得ざるは、恨む可しと爲すなり

十七日、早發、伯成送出郊門、一里登紀三井寺、堂宇宏麗、安十一面觀音、香客陸續來賽、堂前有傑閣架崖而起憑欄俯瞰、

十七日早に發す、伯成送りて郊門を出づ、一里にして紀三井寺に登る、堂宇宏麗なり、十一面觀音を安んず、香客陸續として來り

和歌浦玉津島諸勝、近在目睫山水明媚、秀色可餐、浦島之名宇内、終不誣也、子成之游蓋不至此間、故不滿於和歌浦勝也、不然、子成明眼之士、何獨不知此爲佳山水耶、所謂身在廬山中、不知其眞面目者歟、客有識當時之事者、謂子成非不至此間、聞此寺藏古畫幅、與野呂介石特來觀焉、無可意者、子成悵然悔來、是既不滿於假山水、遂併眞山水唾棄之耳、出後門、下橙、得旗亭而入、春峰與其僦人先來待焉、發行厨餞余々感其意、盡醉別去行上藤白嶺、輿中望見阿淡諸島、愈上攝播諸縹渺現出於碧瑠璃上比三井更爲大觀、嶺已盡、遇一峻阪、曰蕪阪、石芒嶮足險更甚、降渡一水曰在田川、又踰絲_糸賀保津二嶺此間屬在田郡、少稻田、土民種橘爲生、蒼翠滿目、無山谷非橘翠、紀國之橘爲地方名產、世所偏識也大史公以爲蜀漢江陵千樹橘其人等千戶侯在田橘樹之夥、不知可封幾千戶侯我茶磨山莊近亦種橘樹十株、行詢之士人、詳其培養之法記之而去、晚宿湯淺、距栖原可半里、故人菊池士固居在焉、士固別號溪琴、詩名噪世、又好講武奇士也、遣靖共訪問之、約明日來訪

賽せり、堂前に傑閣の崖に架して起る有り、欄に懲りて俯瞰すれば和歌浦、玉津島の諸勝近く目睫に在り、山水明媚、秀色餐す可し、浦島の宇内に名ある、終に誣ひざるなり、子成の游ぶ蓋し此間に至らず、故に和歌浦の勝に満たざりしなり然らざれば子成は明眼の士、何ぞ獨り此佳山水爲るを知らざらんや、所謂身、廬山の中に在れば、其眞面目を知らざる者か、客に當時の事を識る者有り、謂ふ子成此間に至らざるに非ず、此寺古畫幅を藏すと聞き、野呂介石と歟に特に來りて觀るに、意に可なる者無し、子成悵然として來りしを悔ゆ、是れ既に假山水に満たず、遂に眞山水を併せて之を唾棄するのみにと、後門を出で、橙を下り、旗亭を得て入る、春峯其僦人と與に先に來りて待つ、【是日魯峯、來青出餞の設けありしも、事に阻まれて果されず、春峰をして代りて來らしむ】一行厨を發きて余を餞す、余其意に感じ、醉を盡して別れ去る、行々、藤白嶺に上る、輿中より阿淡諸島を望見す、愈々上れば、攝播の諸山縹渺として碧瑠璃上に現出す、三井に比して更に大觀爲り、嶺已に盡きて一峻阪に遇う、蕪阪と云ふ、石芒足を嚙んで險更に甚し、降つて一水を渡る、在田川と曰ふ、又絲賀、保津の二嶺を踰ゆ、此間在田郡に屬せり、稻田少し、土

十八日、在湯淺、湯淺瀕海、舟舶輻湊、
 人戸二千餘、爲紀中好港、旅店臨港、有
 扁曰古碧樓、曉起揭簾、烟消日出、海山
 縹渺、處々有款乃聲、柳州詩興可想、飯
 訖率從侶步到岸上、刈藻島當前有一竅通
 明、頻奇沿岸到廣村、人烟亦稠、甲寅海
 嘯之變、屋舍毀壞、未盡復、午後士固拉
 詩僧冷雲栖原畫師黃中章出雲來、張宴談
 論、約明日日下而罷

民は橘を種えて生と爲す、蒼翠目に満ち山
 として谷として橘翠に非ざるは無し、紀國
 の橘は地方の名産爲るは世の偏く識る所な
 り、大史公以爲、蜀漢江陵千樹の橘、其人
 千戸侯に等しと在田は橘樹の夥しく數千戸
 侯を封すべきやを知らず我が茶磨山莊、近
 く亦橘樹十株を種う、行くく之を土人に
 詢ひ、其培養の法を詳にし、之を記して去
 る、晩に湯淺に宿す、栖原を距る半里可な
 り、故人菊地士固の居あり、士固別號は溪
 琴、詩名世に噪し、又好んで武を講ず奇士
 なり、靖共を遣して之を訪問せしめ明日の
 來訪を約す

十八日湯淺に在り、湯淺は海に瀕し、舟舶
 輻湊す人戸二千餘、紀中の好港爲り、旅店
 は港に臨む、扁有り曰く古碧樓、曉に起き
 て簾を掲ぐれば、烟消えて日出で、海山縹
 渺、處々款乃うたぬの聲有り、柳州の詩興想う可し、
 飯訖り、從侶を率ゐ、歩いて岸上に至る、
 刈藻島前に當り、一竅ありて明を通ず、頗
 る奇なり、岸に沿ひて廣村に到れば、人烟
 亦稠おほし、甲寅海嘯の變に屋舍殷壞して未だ
 盡ことごとくは復せず、午後士固詩僧冷雲栖原の
 人畫師黃中章を拉して來る、宴を張りて談
 論するに明日を約し、日下日没つて罷む

十九日、冷雲來迎、詣菊池氏、主人設床こしかけ、於中庭延余及從侶、泉石幽麗、櫻花盛開、掩映其上、啜茗顧盼、吟賞者久之、還登堂、堂宇高敞、濱口某從廣村來會、雅飲竟日、雲南雲樵作畫、余亦醉揮數紙、主人多藏古名刀、請觀之、燈下發匣出示寒氷凜然、一坐傳觀侑飲、時山月末升、庭下泉聲益幽杜詩所謂暗水流花徑、春星帶草堂爲此夜景況、所謂檢書燒燭短、看劍引盃長、爲此夜興趣、與千餘年前左氏夜宴所遇正同、見燭跋而散

二十日早踰鹿脊嶺、險甚、地已屬日高郡、橘林盡而桂林來桂之多以谷量、不讓在田之橘、採爲藥材、送京阪、亦山中經濟也、歷原谷、至吉田、有八幡祠、壯嚴、鐘卷村、江川大里正瀨見善水衛門令其外弟小池甚七、鹽崎理一、來迎、導上道成寺寺大寶中、藤原道成奉勅營造、已成以其名命之、經千有餘年、堂宇古朴、佛像諸物並有古色、庭多欽瓦、盃上世之物、拾數

十九日、冷雲來迎、菊池氏に抵る、主人床を庭中に設け、余及從侶を延く、泉石幽麗なり、櫻花盛開して其上に掩映す、茗を啜りて顧盼吟賞するもの之を久しうす、還つて堂に登る、堂宇高敞、濱口某廣村より來り會し、雅飲日を竟ふ、雲南雲樵畫を作す、余も亦酔いて數紙に揮ふ、主人多く古銘刀を藏せり、之を觀ん事を請ふ、燈下に匣を發きて出し示さる、寒氷凜然たり、一坐傳觀して飲を侑む、時に山月未だ升らず庭下の泉聲益幽なり、杜詩に所謂暗水花徑に流れ、春星草堂を帶ぶは此夜の景況爲り、所謂書を檢して燭を燒くこと短かく、劍を見て盃を引くこと長しとは此夜の興趣爲り、千餘年前左氏夜宴と遭ふ所正に同じ燭跋を見て散ず

二十日早に鹿脊嶺を踰ゆ、地は已に日高郡に屬す、橘林盡て桂林來る、桂の多きこと谷を以て量る、在田之橘に譲らず、採りて藥材と爲し、京阪に送る、亦山中の經濟なり、原谷を経て吉田に至れば八幡祠有り、壯嚴なり、鐘卷村に至る、江川の大里正瀨見善水其外弟小池甚七、鹽崎理一をして來り迎へしむ、導かれて道成寺に上る、寺は大寶中藤原道成勅を奉じて營造し已に成るや、其名を以て之に命ず、千有餘年を経て、

片眞歸裝中、世傳延喜中、本地處女悅旅
僧顔色、桃之僧欺女逃去、女忿恚、化蛇
遂之、僧窘急、奔入此寺乞救、道侶伏之
大鐘内、蛇至、以尾纏鐘數匝、鐘鎔僧死、
謠曲及院本並皆演之、固爲烏有之談、然
元亨釋書、已載其事、此寺所傳古畫、亦
有其圖、爲世人之口實久矣、堂傍有大櫻
樹、爲數百年物、花已盡殘、紀地溫暖、蓋
花候先我郷殆十日、又其傍有一樹稍小、蓋
爲晚櫻、花正盛、僧設榻樹下、供茶糕、
休歇良久而去、渡日高川、入江川村、瀬
見父子、出迎延於堂上、酒待、余復患腹
瀉辭宴早寢

二十一日朝主人又設宴、余病已愈、乃傾
數盞神旺揮灑數紙欲去、主人懇々挽留、
又有常中酒不能起、遂又留宿、主人能和
歌子弟亦皆解韵事、有都人士之風

堂宇古朴、佛像諸物並に古色有り、庭に欽
瓦多し、蓋し上世の物なり、數片を拾ひて
歸装の中に眞く、世傳ふ、延喜の中、本地
の處女、旅僧の顔色を悦びて、之に挑む、
僧女を欺きて逃れ去る、女忿恚し蛇と化し
て之を逐ふ、僧窘急し奔りて此寺に入り救
ひを乞ふ、道侶は之を大鐘の内に伏す、蛇
至りて尾を以て鐘を纏ふこと數匝、鐘鎔け
て僧死す、謠曲及院本並に皆之を演ずるも、
固より烏有の談爲り、然も元亨釋書、已に
其事を載せ、此寺傳ふる處の古畫、亦其圖
有り、世人の口實となる久し、堂傍に大櫻
樹有り、數百年の物爲り、花は已に盡きて
殘る、紀の地は溫暖花候我郷に先づる殆ん
ど十日なり、又其傍らに一樹有り稍小、蓋
し晚櫻爲り、花正に盛なり、僧榻を樹下に
設けて茶糕を供す、休歇良久しうして去る、
日高川を渡りて、江川村に入れば、瀬見父
子出でゝ迎へ、堂上に延きて、卮酒欸待す
余復腹瀉を患ひ、宴を辭して早く寢ぬ

二十一日朝主人又宴を設く、余の病已に愈
ゆ、乃ち數盞を傾く、神旺んに揮灑する事
數紙、去らんと欲すれば主人懇々として挽
きて留む、又有常は酒に中つて起つ能はず、
遂に又留つて宿す、主人は和歌を能くし、
子弟亦韵事を解す、都人士の風有り、

二十二日辭瀨見氏、主人贐以一盆山色淺青多峰巒、道瓜谷所產、紀中古屋谷之石名天下余嘗獲一座於小浦氏、色如精鐵、頗大有雙峰又爲異觀、今得此石併雙美、余之喜如何哉、理一及其姪某善水携具、嫡子送到印南、共飲干旗亭別去、抵南部、里正山內保輔置酒屈留、遂宿焉、田邊流寓儒生陰山吉朗携日下並木二小生來見、後見大里正日下某於周參參見、識土豪並木貞藏於安居、爲二生父兄

二十三日朝冒雨赴田邊、吉朗及兩生步從、余輿中行閱吉朗文稿批之、吉朗江戶產、自言幼從學松崎慊堂、先生之詣慊堂、侍執食飲、余與慊堂屢相往來、應有此事、距今二十餘年、茫然不能記、午飯於旅店、雨晴欲往湯崎、謀之主人主人謂陸行山徑崎嶇三里、舟行海上直徑僅一里餘耳、乃僦舟、吉朗送余附載、兩生亦相送畏風浪至嵯返去、此間爲古歌所云風莫濱、然此日風勁浪怒、舟傾側欲覆者數、不一餉時到岸、岸邊細沙瑩白、號曰白良濱、亦入古歌、海中一島、半腹有竅中依稀見行帆、

二十二日瀨見氏を辭す、主人贐るに一盆山を以てす、色淺青にて峰巒多し瓜谷の産する所と道ふ、紀中古谷の石は天下に名あり、余嘗て一坐を小浦氏に獲たり、色は精鐵の如く頗る大、雙峰有り、亦異觀爲り、今や此石を得て雙美を併す、余の喜び何に如かんや、理一及某姪某、具を携へ、送りて紀南に到る、共に旗亭に飲みて別れ去る、南部に抵る、里正山内保輔、置酒して屈げて留む、遂に宿す、田邊流寓の儒生陰山吉朗、日下、並木の二小生を携へて來り見ゆ、後大里正日下某を周參見に見る、土豪並木貞藏を安居に識る、二生の父兄爲り

二十三日朝たに雨を冒して田邊に赴く、吉朗及兩生歩して從ふ、余輿中にて行く、吉朗の文稿を閲して此を批す、吉朗は江戸の産なり、自ら云ふ幼にして松崎慊堂に從つて學べり、先生の慊堂に詣るや、侍して食飲を執れりと、余は慊堂と屢々相往來せり、應さに此事あるべし、今を距る二十餘年なり、茫然として記する能はず午旅店に飲す、雨晴る、湯崎に適かんと欲して之を主人に謀る、主人謂ふ陸行は山徑崎嶇三里なるも舟行は直徑僅かに一里餘耳と、乃ち舟を僦ふ、吉朗余を送りて附いて載る、兩

甚奇、涉山徑不半里達湯崎、地有温泉、故得此名亦舊有鉛抗、故一名鉛山、南海祇伯玉嘗謫居於此、選其勝概爲七境、各有詩、附以小引、曰銀沙步、即謂白浜濱、曰金液泉、即謂溫湯、曰芝雲石、在山上成靈芝狀、曰龍口巖、曰平草原、曰藥王林、曰行宮址、曰既仄、不能悉造觀、往浴溫湯、湯在數所其最遠者涉海岨數千武、得一茅屋入之、巖間湯湧、湛然一地、成天然石槽、坐一餉時、亡終日之勞、書記載、齋明天智二帝浴牟漏溫泉、盖此湯也、紀府儒士仁井田好古碑詳細之、還宿里正某氏、出示伯玉手書七境詩卷、頗爲可觀

生も亦相送る、風浪に畏れ崖に至りて返り去れり、此間は古歌云ふ所の風莫濱たり、然も此日は風勁く浪怒り、舟は傾側して覆らんと欲する者しばく、一餉時ならずして岸に到る、岸邊は細沙瑩白、號して白良濱と曰ふ、亦古歌に入れり、海中の一島、半腹に竅あり、竅中依稀として行帆を見るは甚だ奇なり、山徑を渉ること半里ならずして、湯崎に達す、地に温泉あり、故に此名を得たり、又舊く鉛抗有り、故に一に鉛山と名く、南海祇玉、嘗て此に謫居し、其勝概を選みて七境と爲し、各詩あり、附するに小引を以つてす、曰く銀沙步、即ち白浜濱と謂ふ、曰く金液泉、即ち溫湯と謂ふ、曰く芝雲石、山上に在りて靈芝の状を成す、曰く龍口巖、曰く平草原、曰く藥王林、曰く行宮址、日既に仄く、悉く造り觀る能はず、往きて溫湯に浴す、湯は數所に在り、其最も遠き者は海岨を渉る數千武、一茅屋を得て之に入る、巖間に湯湧き、湛然たる一地に天然の石槽を成す、坐すること一餉時、終日の勞を忘る、書記載する所、齋明天智二帝、牟漏溫泉に浴せらるとは、盖し此湯なり、紀府の儒士に仁井田好古の碑あり、之を詳にせり、還つて里正某氏に宿す、伯玉手書七境詩卷を出し示さる、頗る觀るべき爲り

二十四日、早發、上高瀬山、非孔道、山徑茅塞、纔通一綫、榛荆礙輿不可行、土人又皆漁夫不慣扛輿、乃捨輿步行、三里、抵富田、從田邊至三山有兩路、北由三栖入山路者、曰中邊地、香客皆就焉、南由富田沿岸者、曰大邊地、除吏役土人外、少經過者、故無酒茶店、無逆旅家、就村長若土豪之家辨宿食、午飮訖、渡富田川、頗富庶、不愧地名、有草堂寺、殿閣頗壯、上富田嶺、險殊甚、三里入麓、有水簾、頗壯、流爲澗水、沿路^澗繞、或左或右、揭厲三十餘處、得磧川無復一滴水、盖下爲湫流也、又遇一峻阪、阪下爲安居谷、村長來迎、入宿土豪並木氏、主人通稱貞藏、家世業醫、其父七十餘、已告老、父子皆好文、愛客、盃獻酬、意甚懇惻、使余殆忘爲客旅人、嚮者在紀府所飲、皆土釀、及涉荒海之濱、酒皆美、盖阪船所輸也、但地濱大洋所漁之魚雖鮮、不如府下裏海之美

二十四日早に發す、高瀬山に上る、孔道^{こうどう}(大)道に非ず、山徑茅塞、纔かに一綫を通ず、榛荆^{しんけい}を礙げて行くべからず、土人は皆漁夫にして輿を扛ぐに慣れず、乃ち輿を捨て、步行す、三里にして富田に抵る、田邊より三山に至る兩路在り、北は三栖より山路に入るものを中邊路と曰ふ、香客皆就く、南、富田より海岸に沿ふものを、大邊路と曰ふ、吏役の土人を除くの外は經過する者少なし、故に酒茶の店なく、逆旅の家なし、村長若くは土豪の家に就て宿食を辨ず、午飮訖りて、富田川を渡る、村は頗る富庶にて地名に愧ぢず、草堂寺有り、殿閣頗る壯なり、富田嶺に上る、險殊に甚し、三里にして麓に入る、水簾有り頗る壯なり、流れて澗水と爲り、路に沿ひて廻繞し、或は左し或は右す、揭厲^{けいれい}(水を渡る事)三十餘處、磧川を得るも復一滴の水無し、蓋し下湫^{ふくりゅう}流と爲るなり、亦一峻阪に遭ふ、阪下は安居の谷と爲す、村長來りて迎ふ入りて土豪並木氏に宿す、主人通稱は貞藏、家は世々醫を業とす、其父は七十餘、已に老を告ぐ、父子皆文を好んで客を愛す、盃酒獻酬す、意甚だ懇惻、余をして殆んど客旅の人たるを忘れしむ、荒嚮に紀府に在るや飲む所は皆土釀なり、荒

海の濱を涉に及んで酒は皆美なり、蓋し阪

二十五日、早辞並木氏、渡日置川、上佛嶺、亦甚險峻、有婦人充役、擔兩箱重十餘貫、健勝男子三里抵周參參見碧灣丹嵯、匝以島嶼、舟舶湊於其内、民戸五百、郡官行署在焉、宰村上某助右衛門使人迎余、余乃造訪、某設盛饌於廳上、下吏交來勸飲、盡醉辞去、涉海岸、多奇崑、踰倒馬嶺長井阪、日逼虞淵、宿見老津漁家、家甚矮陋、主從六人、纔容膝、器皿又啗飲、寢食皆不安

二十六日、早發、經山路、到江住、地土城某四郎右衛門迎言、昨聞先生來臨、掃館相待、何不來宿、仍入憩於其家、堂宇清楚飲膳皆潔此地距見老津僅里許、晚途不努力、致昨夜煩冤之悔無乃、主人出示木實名曰（木偏に響）樹比櫨子稍小言所採於前島余以爲此

可作念珠、（木偏に響）樹恐念珠之訛嘗聞物產船の輸する處なり、但し地は大洋に瀕す、漁する處の魚は鮮なりと雖も、府下の裏海の美に如かず

二十五日、早に並木氏を辭し、日置川を渡りて佛嶺に上る、亦甚だ險峻なり、婦人有り役を充つ、兩箱重き十餘貫なるを擔ぐ、健なること男子に勝れり、三里にして周參見に抵る、碧灣丹嵯、匝らすに島嶼を以つてし、舟舶其内に湊あつまる、民戸五百、郡官の行署在り、宰村上某人をして余を迎へしむ、余乃ち造り訪ふ、其盛饌を廳上に設け、下吏交々來りて飲を勸む、醉ひを盡して辭去す、海岸を渉る、奇巖多し、倒馬嶺長井阪を踰ゆ、日は虞（黄昏）淵（狭い事）に逼る、見老津の漁家に宿す、屋は甚だ矮陋（狭い事）なり、主從六人纔かに膝を容る、器皿は又啗（小さい事）飲、寢食皆安せず

二十六日、早に發し、山路を経て江住に到る、地土城某迎へて言ふ、昨先生來臨せらるゝと聞き、館を掃つて相待てり、何ぞ來りて宿せざりしと、仍ち入つて其に憩ふ、堂宇は清楚にて、飲膳皆潔し、此地は見老津を距ること僅かに里許りなり、途に晩れて努力せずして昨夜の煩冤を致せり、之を悔ゆるも及ぶなし、主人木實を出して示す、

名を （木偏に彎） □ 樹と曰ふ、木櫨子に比すれば稍小

家以漢名鬼見愁物、當之、未知是否其樹
灌木蔓生非暖地不生、乃乞一掬眞旅裝中、
又聞紀中及薩州有榕樹皆爲暖地故也柳子
厚柳州二月詩云、榕葉滿庭鶯亂啼、記地
異也、乃知紀薩風土、略與西土嶺南同、
主人請書醉揮數紙、移時、此日好晴、海
面風波不驚、乃謀舟行、急櫓三里、一霎
時達江田、大里正浦某里正井沼某出迎款
接、午飮訖涉海岸、行撫好景忽遇巨崑數
十仞當途面橫、望之疑無去路、乃逼見、
巖根折裂、冱然成門、通人馬往來、過者
竦然、至是、已近三山、爲境更奇、前路
之勝可想、經二部二色兩嶺、哺時達串本、
宿無量禪寺、殿堂宏麗、不類僻境、障壁
皆貼應舉蘆雪畫、人物動植、並皆生動、
二人之畫爲院體、文士所不喜然寫生精巧、
越見筆力、非今日所謂文人畫所及、寺僧
供素饌、頃日飽葷腥、忽遇薯蕷羹虎杖
（草冠に組） □ 等食、清澹可腸、庭間白躑躅、正開、
此地花候比日高以西更早、比我鄉應在、
二十日前

なり、言ふ前島にて採る所、余以爲く此念
珠と作す可し、（木偏に彎） □ 樹は恐らく念珠の訛り
ならん、嘗て聞く物産家（全學物考）の漢名に鬼見愁を以
てする者、之に當らん、未だ是否を知らず、
此樹は灌木蔓生して暖地にあらずんば生せ
ず、乃ち一掬を乞ひて旅裝の中に眞く、又
聞く、紀中及薩州に榕樹有り皆暖地たるが
故なり、柳子厚柳州二月の詩に云ふ、榕葉
は庭に滿ちて鶯亂れ啼くと、地の異れるを
記するなり、乃ち知る、紀藩の風土は略西
土、嶺南と同じきを、主人書を請ふ、醉ひ
て數紙に揮ひ時を移す、此日好晴にて海面
は風波驚かず、乃ち舟行を謀り、急に櫓し
て三里、一霎時（暫く）にして江田に達せり、大里正
浦某、里正井沼某出で迎へて款接す、午飮
を訖り海岸を涉りて、行くく好景を撫す、
忽ち巨巖數十仞當に途に面して横はるに遇
ふ、之を望めば去るの路無きかを疑ふ、逼
り見るに及んで巖根折裂し、冱然として門
を成し、人馬の往來を通ぜり、過ぐる者は
竦然たり、是に至れば已に三山に近く、境
は更に奇爲り、前路の勝を想ふべし、二部
二色の兩嶺を経て、哺時串本に達し、無量
禪寺に宿す、殿堂宏麗にして、僻境に類せ
ず、障壁に皆、應舉蘆雪の畫を貼せり、人
物動植並びに皆生動す、二人の畫は院體た

り、文士の喜ばざる所なり、然も寫生は精

爲先導

巧に越筆力を見る、今日文人畫の及ぶ所に
あらず、寺僧素（精進料理）饌（くわん）を供す、頃日葷腥に飽く、
忽ち薯蕷（へしろう）羹虎杖（草冠に俎）□（いたどりの漬物）の食
に遭ふ、清澹にして腸に可なり、庭間の白躑
躑正に開く、此地の花候は日高以西に比すれ
ば更に早し、我郷に比すれば應に廿日の前に
あり

二十七日、早發、過橋杭浦、浦口奇巖羅
列三十餘座、如瑤參、如玉笏、如圭之植、
如魚之立、如冲霄之竹、如書空之筆、不
悉將、雖大小長短不同、亦皆拔地特立、類
西土所云砥柱者、土人名此浦爲橋杭、杭
即柱所名之、意乃同、外有三島擁之、布帆
行島巖之間、布置已妙、點綴又工、可謂
天然好畫圖矣、昨暮鯨魚入近灣、漁夫發
舸捕之、余在串本聞之、欲來觀、戒從者
辨杖鞋、既而聞鯨蕩逸遁去、乃止、爲可
恨也、村吏來迎、沿古座溪北上、到古田
村、入大里正橋爪周輔之宅、在溪上、
前對一島、其上峭壁碧樹、亦爲佳境、主人
延余、一堂宇翼然、高出樹梢、把盃酬酢於
水光山色中、甚有幽致、此行來青爲余云
古座川之勝、有九里峽之上、村郡宰亦
勸往觀、謀之主人、今日已未牌、請明日
巖爲最、相距三里、今日已未牌、請明日

二十七日、早に發して橋杭浦を過ぐ、浦口
に奇巖の羅列するもの三十餘座なり、瑤參
の如く、玉ぎよく笏こつの如く、圭けいの植よくの如く、魚
の立たの如く、冲ちゆう霄しやうの竹の如く、書空しやうくうの筆
の如く將に悉くすべからず、大小長短は同
じからずと雖も、亦皆地を抜きて特立し、
西土云ふ所の砥柱なる者に類す、土人此浦
を名けて橋杭と爲す、杭は即ち柱にして、
名づくる所の意は乃ち同じ、外に三島あり
て之を擁す、布帆は島巖の間を行く布置已
に妙に點綴又工みなり、天然の好畫圖とや
謂つ可し、昨暮れに鯨魚近灣に入り、漁夫
舸を發して之を捕へんとすと、余は串本に
在りて之を聞き、來り觀んと欲し、從者を
戒めて杖鞋を辨ぜり、既にして鯨、蕩逸し
て逃れ去ると聞き、乃ち止む恨む可きと爲
すなり、古田村に到り大里正橋爪周輔の宅に
上し、

入る、宅は溪上に在り、前は一島に對す、

異聞故爲選此名曰明月巖在北岸、水清而

其上峭壁にて碧樹あり、亦佳境爲り、主人余を延くに堂宇は翼然として、高く樹梢を出づ、盃を把りて水光山色の中に酬酢す、甚だ幽致あり、此行來青余のために言ふ、古座川の勝は九里峽の上にと、村上郡宰も亦往きて觀ん事を勸む、之を主人に謀るに、主人言ふ、此溪の勝は巨巖を以て最となす、相距る三里なり、今日は已に未牌（已の刻）なれば、請ふ明日先導を爲さんと

二十八日主人命泛兩船於前島、與醫師玉川龍藏導余俱乘其一、使從者其一、並遡洄而上、溪流屈曲舟行如窮而又通、兩岸怪崑奇峰交迭去來、不暇應接、有山陰道上之想、主人道世稱九里峽之勝、以其當兩宮孔道也、此溪之奇更在九里峽之上、但地甚偏僻無世人過觀者、故其名不甚顯、峰巒崑石未有名、其有名者亦土民所慣呼、不堪俚俗、願先生爲選佳名命之余一日游不能悉其勝、試取其最可喜可駭者擬議名之、未知當否、曰少女峰在南岸、笑顏嬌然、有蹠躑躅飛舞之態、謂昔十七歲好女子投身峰下、因呼十七嶽、甚不典雅故改命之曰鱸魚潭在北岸重崑下、水成靛青色、主人道、土人往々網獲大鰻、有至長五六尺重四五貫者其小者猶不下三尺、尤屬

二十八日、主人に命じて兩船を島前に泛べ、醫師玉川龍藏とともに余を導いて、に其一に乘じ、從者をして其一に乘ぜしめ、並びに溯廻（さかのぼる）して上る、溪流は屈曲し、舟行窮まるが如くにして又通ず、兩岸の怪巖奇峰は交迭去來し應接に暇あらず、山陰道上の想ひあり、主人道ふ、世に九里峽の勝を稱するは、其兩宮の孔道に當るを以つてなり、此溪の奇なる更に九里峽の上にある、但し地は甚だ偏僻にて世人の過ぎて觀る者無し、故に其名甚だ顯はれず、峰巒巖石、未だ名有らず、其名の有る者も亦土民の慣呼する所にして、俚俗に堪へず、願くば先生爲めに佳名を選びて之に命ぜよと、余一日の游其勝を悉くす能はず、試みに其最も喜ぶ可く駭くべき者を取り擬議して之

に名く、未だ當否を知らず、曰く少女峰は

駛月落其上、浮金沈玉好游者棹舟來、繞
崑留賞、殆作瑤宮玉闕之想、故爲選此名、
且岸上之村曰月瀨則此巖以月得名亦已久
矣、曰巨人巖在南岸崑峨如人着冠冕立、
故選此名、曰玉筍峰、在北岸、拔地特立
數十仞碧尖指天、舊名飯盛、不甚相肖、
故改命之、過立合村則爲藍瀨村、巨崑所
在、望見漁夫棹過崑下、詔舟芥、詔人如豆
崑大可知、及逼 詔如對丘山、使人駭極、
其高廣謂二百仞、橫三百步、周廻里許 植村

氏本朝奇跡談以爲高七十五間廣二百六十間餘小
原氏桃洞遺筆以爲高百十間廣二百四十間二書有
異同如此奇跡談高字下恐
脫百字今姑從土人之說 一崑之高且大如此、

所未嘗見聞、享保中植村某等 左平 奉臺命

採藥諸州、見此崑、謂爲海內第一大石想
應然巖然舊無名、但稱一枚石耳、余爲選
其名、曰齊雲巖巖紫赤色又撰其一名曰賽
赤壁但蘇賦謂斷岸千尺、則知赤壁非一全
石、應讓此巖之奇也對岸有一高峰、松杉
被巔成雨點皴、似大米畫法、欲名之曰滴
翠峯可歟、停舟巖下酌酒於碧嵐之間、左
右顧眄晷移數刻乃命歸棹順流而下一瞬三
里、日未沒、抵主人宅前、廻舟繞嶋、嶋

北巖樹深邃、清瀨有聲主人自言遇盛署、

南岸に在り、笑顔嫣然、へんせん 踴躍飛舞の態あり、
謂ふ昔十七歳の好女子身を峯下に投ず、因
りて十七嶽と呼ぶと甚だ典雅ならず、故に
改めて之に命じて云ふ、曰く鱸魚潭、北岸
重巖の下に在り、水は靛青色てんせいしよ（藍色）を成す、
主人道ふ、土人往々大鰻鱺を網獲す、長五
六尺、重さ五六貫に至る者あり、其小なる
者も猶三尺を下らず、尤も異聞に属すと、
故に此名を選し爲り、曰く明月巖、北岸に
在り、水清して日其上に落ちて駟る、金を
浮べ、玉を沈む游を好む者は舟に棹して來
り、巖を繞つて留つて賞し、殆んど瑤宮月
闕の想を作すと、故に此名を選し爲り、且
岸上の村を月の瀨と曰ふ、則此巖の月を以
つて名を得る、亦己に久し、曰く巨人巖、
南岸に在り、崑峨として冠冕を着けて立つ
が如し、故に其名を選し爲り、曰く玉筍峰、
北岸に在り、地を抜いて特立すること數十
仞、碧光天を指す、もと飯盛と名づく、甚
だ相肖ず、故に改めて之を命ず立合村を過
ぐれば、即ち藍瀨村爲り、巨巖の在る所な
り、漁夫の棹して巖下を過ぐるを望み見れ
ば、舟を 詔るに芥の如く、人を 詔るに豆の
如し、巖の大なる知る可し、逼り 詔るに及
んで丘山に對するが如く、人をして駭き極
らしむ、其高廣を問へば、謂ふ高さ二百仞、

横は三百歩、周道は里許、（植村氏の本朝奇
坐舟午睡於其下快甚、余欲名之曰清暑島
可歟、酈道元有云、石溜湍波浮響無輟、
山水之趣、尤深人情、是爲信安溪水言、
余於此溪亦云余發紀府以來、沿路川流見
鉤香魚者、其大不過二三寸、今日游此溪、
見香魚上瀬、有長六七寸者、主人網獲數
尾、製爲鮓以侑飲、味濃厚、如我州五六
月間所食、極暖之地、魚亦早長成歟

跡談には以つて高さ七十五間、廣さ二百六
十間餘と爲し、小原氏の桃洞遺筆には以つ
て高さ百十間、廣さ二百四十間と爲す、二
書の異同有る此の如し、奇跡談は高字の下、
恐らくは百の字を脱せるならん、余姑らく
土人の説に従ふ（一巖の高さの且大此の如き
は、未だ嘗て見聞せざる所なり、享保中、
植村某等臺命を奉じて、薬を諸州に採る、
此巖を見、謂つて海内第一の大石と爲す、
想ふに應さに然るべし、巖はもと名なし、
但一枚石と稱するのみ、余爲に其名を撰び
て齊雲巖と曰ふ、は巖紫赤色なり、又其れ
に一名を撰びて賽赤壁と曰ふ、但し蘇賦に
斷岸千尺と謂ふあり、則ち知る、赤壁は一
全石にあらず、應さに此巖の奇に譲るべき
なり、岸に對して一高峯あり、松杉を巔に
被つて、雨點皴を成す、大米の畫法に似た
り、之に名けて滴翠峰曰はんと欲す可なら
んか、舟を巖下に停めて、酒を碧嵐の間に
酌み、左右を顧眄す、暑移る數刻乃ち命じ
て棹を歸し、流れに順ふて下る、一瞬三里、
日は未だ没せざるに、主人の宅前に抵る、
舟を廻らして島を繞る、島北は巖樹深邃、
清瀬に聲有り、主人自ら言ふ清暑に遭へば、
舟に坐して其下に午睡す、快甚しと、余之
に名けて清暑島と曰はんと欲す可ならんか、

酈元道の云へる有り、石榴湍波、浮響輟む

二十九日辞橋爪氏、玉川生携行厨、送到
浦神村雨甚、午憩於里正家、一醉告别、
僦舟渡裏海中途風烈不可舟、至下里村上
岸、陸行經湯川天滿等處、昏黑達那智山
投宿實法院、夜聞有聳殷々震空中、蓋瀑
聲也、余聞那瀑之勝久矣私謂、明日得目
擊應慰平生之想、意興勃然、喜而不寐

三十日快晴、早起揭簾、瀑布在前心目
醒、相距八町、自腰以下、蔽林麓、有神
龍見首不見尾之致、紀國一位、老候嘗來

遊宿此院親書天奇地靈四大字、賜於院主

無く、山の水趣き、尤も人情に深しと、是
は信安の溪水の爲めに言へるも、余は此溪
に於て亦云ふ、余は紀府を發してより以來
沿路の川流、香魚を釣る者を見るに其大さ
二三寸に過ぎず、今日此溪に遊びて、香魚
の瀬を上るを見るに、長さ六七寸なる者有
り、主人數尾を網獲し、製して鮓と爲して、
以て飲を侑む、味は濃厚にして我が州五六
月の間、食ふ所の如し、極暖の地、魚も亦
早く長成するか

二十九日橋爪氏を辭す、玉川生携行厨（辨當）
を携へ、送りて浦神村に到る、雨甚し午、
里正の家に憩ふ、一醉して別れを告げ、舟
を僦ひ、裏海（内海）を渡る、中途にして風烈
しく舟すべからず、下里村に至りて岸に上
る、陸行して湯川天滿等の處を経て、昏黑
那智山に達して實法院に投宿す、夜聲あり、
殷々として空中に震ふを聞く、蓋し瀑聲な
り、余那瀑の勝を聞く事久し、私におもふ、
明旦目撃するを得て、應に平生の想を慰む、
意興勃然、喜びて寢れず

三十日、快晴、早く起きて簾を掲ぐれば瀑
布は前に在り、心目に醒む、猶相距る事
八丁、腰より以下は林麓に蔽はれ、神龍の

首を見はして尾を見ざるの致あり、紀國一
院主裝飾爲扁、揭於正殿楯上、朝餐訖辞
院、屈曲下阪到瀑下、坐亭仰觀瀑之全身
盡露如白龍之倒垂到地、下遇巉崑輒怒雷
鳴、飛沫霏散、至四五十步外人衣盡濕其
壯其快、更勝素聞、但其下深潭絕谷、不
可逼^逼、見土人說、瀑長百四十仞、其頂
徑八仞、脚下怒張有十五六仞之廣、其底
成潭、可廻千斛船云、天下談瀑布者、先
屈指於此不亦宜乎、左折攀阪到大悲閣、
如意輪觀音像在焉、西國三十三所觀音、
以此寺爲第一紀三井寺居第二適大士啓龜、
香客駢至、讚唱之聲不斷、其上有那智廟
熊野三山之一也、與本新二宮同祀天七地
五之神、瞻拜而去、上大雲鳥阪、號爲熊
中絶險、余憫驛夫之勞、捨輿步行回顧瀑
布、爲一匹飛練搖曳雲際而下、亦爲一奇
觀、己而重巒層巘不見^巒影、抵嶺忽轄然
望雲帆於洋中日舟見嶺山上有山升而復下
四里抵小口村、日已斜宿逆旅

位の老候嘗て來て遊び、此院に宿つて、親
しく天奇地靈の四大字を書して院主に賜ふ、
院主裝飾して扁を爲し、正殿の楯上に掲ぐ、
朝餐を訖りて院を辭し、屈曲して阪を下つ
て瀑下に到る、亭に坐して仰ぎ觀れば、瀑
の全身盡く露る、白龍の倒垂して地に到る
が如く、下つて巉巖に遇ひ、輒ち怒つて雷
鳴し、飛沫霏散して、四五十歩の外に至り、
人衣盡く濕ふ、其壯にして其快なる更に素
聞に勝れり、但其下は深潭絶谷にして、逼
り^逼るべからず、土人の説をきくに瀑の長
さ百四十仞其頂き徑八仞、脚下怒張して十
五六仞の廣さありと、其底は潭を成し、千
斛船を廻す可しと云ふ、天下の瀑布を談る
者は、先づ指を此に屈す亦宜ならずや、左
折して阪を攀ぢ、大悲閣に至る、如意輪觀
音の像在り、西國三十三所の觀音は此寺を
以て第一と爲し、紀三井寺第二に居る、適(た
ま)く大士龜を啓く、香客駢び至り、讚唱
の聲斷へず、其上に那智廟あり、熊野三山
の一なり、本新二宮と同じく、天七地五の
神を祀れり、瞻^{せん}拜して去る、大雲取阪を上
る、號して熊中の絶險と爲す、余驛夫の勞
を憫れみ、輿を捨て、步行す、瀑布を回顧
すれば一匹の飛練と爲り、雲際に搖曳して
下る、亦一奇觀と爲す、已にして重巒層巘、

瀾影きえい（日光）を見ず、嶺に抵れば忽ち轄然とし

閏月朔早發、步踰小雲鳥阪、險峻不讓大
雲鳥詰曲而上、朝霧始霽余已行出木末、
回顧僕從猶在水濱、宛然身在老杜詩中、
三里抵筌川本宮神官竹坊大内藏使其代官
來迎、半里抵本宮入憩於竹坊氏主人迎接
酒食之饗、大里正岩崎某伊右衛門來謁、前導
半里餘、至湯峰投宿旅店、日猶高、往坐
溫湯、湯槽數所、有稱小栗湯者鎖戸不許
闌入、里正持鑰啓之、使一行人入浴焉湯
自山上來甚熱、可熟穀米菜蔬傍有冷泉引
而和之以筧相承、漉作飛泉落槽中、瀉頂
顚拍肩背、痛快已甚、余連日蹙蹙險路甚
疲、半日之浴肢體乃覺輕便、醉後就枕、
一睡到曉

二日早辭湯峰、至本宮入拜諸神廟、々宇
て雲帆を洋中に望む、舟見山と曰ふ山上に
山あり、升りて復下る、四里にして小口村
に抵る、日已に斜なり、逆社に宿す

閏月朔、早に發し、步して小雲鳥阪を踰ゆ、
險峻なること大雲鳥に讓らず、詰曲して上
る、朝露始めて霽る、余已に行きて木末を
出で、僕從を回顧するに、猶水濱に在り、
宛然として身は老杜の詩中にあり、三里に
して筌川に抵る、本宮の神官竹坊大内藏、
某代官をして來り迎へしむ、半里にして本
宮に抵り、入りて竹坊氏に憩ふ、主人迎接
して酒食の饗有り、大里正岩崎某來り謁す、
前導半里餘にして湯之峰に至り、旅店に投
宿す、日猶高し、往いて溫湯に坐す、湯槽
數所、小栗湯の稱あるもの戸を鎖して闌に
入るを許さず、里正鑰を持つて之を啓き、
一行の人をして入浴せしむ、湯は山上より
來る、甚だ熱く、穀米菜蔬を熟す可し、傍
らに冷泉有り引いて之に和す、筧を以て相
承け、漉いで飛泉を作し槽中に落つ、頂ちようしん顚
（あたま）を瀉ぎ背肩を拍つ、痛快已甚し、余
連日險路を蹙蹙（めぐりあるく）して甚だ疲
る、半日の浴、肢體乃ち輕便なるを覺ゆ、
醉後枕に就き、一睡曉に到る

二日早に湯の峰を辭し、本宮に至り、入り壯麗三山有廟、以本宮爲始、新宮次之、那智又次之所祀皆同、竊以爲諸神中蓋以諾冊二尊爲主、以其垂跡於紀國也、其他天地諸尊並爲客位、如速玉男事解男、軻愚突智命、並爲陪坐耳、乃謀買舟、下熊野川、解纜巴潭、湍激流駛、兩岸怪巖錯出、有一巖似佛軀者、立於西岸、問之、舟人曰、此爲浮屠巖、石之皴、皆大小斧劈、忽有攢峰駢立於東岸、獨作荷葉皴、清峭可喜、間之、曰槿木山、山下出一大石、成卷軸之狀、曰絹卷、但舟行迅疾、不得詳玩、至河合村、一水北來、曰北山川、兩川相合、面流益鉅、右顧見一大石、如僧人端坐、面目悉、曰達磨巖、過萬歲谷、老杉森列、杉盡處得一飛泉、如長紳垂下、曳布瀑、其南有兩級泉、曰葵瀑、並在西岸、對峕有三級泉、曰三重瀑、三瀑相望、清人心目、又其南一大巖、立於西峕、曰爐巖、巖上有一石頭、張脚斂、有兩石尖長相對而立、土俗所云庖丁石、肉筋石者也、又有魚板石、骨石、肝石、並形似名、名已俗、形亦不甚相類、魚板之側有一巨石、曰鐘巖、又未得其形容、峕中之勝、雖名於世、而地險遠、唯有香客經過、少士人游涉者、土民以賃目雇口、妄下標目、汚巖泉石、爲可惜焉、在舟中舉盃於山色灘聲間、右眄左顧、攬奇領勝、

行大李將軍圖中、過川井村則山舒水緩、
て諸神の廟を拜す、廟宇は宏麗なり、三山
に廟あり、本宮を以て始と爲し新宮之に次
ぎ、那智又之に次ぐ祀る所は皆同じ、竊か
におもへらく諸神の中蓋し諾冊二尊を以て
主と爲す其紀國に垂跡するを以て也、其他
の天地諸尊は並びに客位爲り、速玉男事解
男、軻愚突智の諸の命の如きは並びに陪坐
爲る耳と、乃ち謀りて舟を買ひ、熊野川を
下る、纜を巴ともゑがふち潭に解く、湍激し流れ駛る、
兩岸の怪巖錯出して、一巖の佛軀に似たる
者有り、西岸に立てり、之を問へば舟人曰
く、此浮屠巖爲りと、此間巖石の皺、皆大
小の斧劈なり、忽ち攢峰の東岸に駢立する
有り、獨り、荷葉皺をなし清峭喜ぶ可し、
之を問へば樟しゅもく木山と曰ふ、山下一大石を出
す、卷軸の狀を成す、絹卷と曰ふ、但し舟
行迅疾にして、詳玩するを得ず、河合村に
至れば、一水北より來る北山川と曰ふ、兩
川相合して流れ益々ますますおほ鉅ひなり、右顧一大石
を見る、僧人の端坐するが如し面目悉く
はる達磨巖と曰ふ、萬歳谷を過ぐれば老杉
森列し、杉の盡くる處一飛泉を得、長ちやうしん紳の
垂下するが如し、曳布瀑と曰ふ、其南に兩
級の泉あり、葵の瀑と曰ふ、並びに西岸に
在り對崖に三級の泉有り、三重の瀑と曰ふ、
三瀑相望めば人の心目を清くす、又其南に

一大巖西崕に立てり爐巖ふいいわと曰ふ、巖上に一爲郭熙平遠圖望新宮城於雲間、其下帆檣林立、須叟抵津口、從巴潭至此九里八町、不半日而達焉、上岸日纔過午、飯於逆旅、往詣神廟壯麗不讓本宮、出門左右數折、涉街里城廓間里許、詣飛鳥宮、宮中有一小祠、祀徐福宮東南田畝間有一碑、鐫秦徐福墓四大字、蓋近世所建古來談者以熊野三山爲蓬萊三山、遂至築徐福敷、但海內稱蓬萊者非一、富士熱田嚴島併熊野爲四所、就中熊野較爲有據案元吳萊有聽客話熊野徐市廟七言古詩、其首云、大瀛海岸古紀州、山石萬仞挿海流、徐市求仙乃得死紫芝老盡令人愁、見淵顛集我明德中、僧絕海入明謁大詔問以徐福事、海對以詩曰『熊野峰前徐福祠滿山藥草雨餘肥、祇今海上波濤穩、萬里好風須早歸、大詔賜和』云々見蕉堅稿據此則徐福有祠亦已久矣

石有り、頭張り脚斂まる、両石あり尖長相對して立つ、土俗云ふ所、庖丁石肉筋石なる者なり、又魚板石、骨石、肝石在り、並びに形の似たるを以て名く、名已に俗なり、形も亦甚だ相類せず、魚板の側に一巨石有り、鐘巖と曰ふ、又未だ其形容を得ず、峽中の勝は世に名ありと雖も、而も地は險遠にして唯香客の徑過する有るも、士人の游渉する者少なし、土民は賃目雇口（道案内を生計となすもの）を以て、妄りに標目を下し、泉石を汚穢するは惜む可しと爲す、舟中に在りて、盃を山色灘聲の間に擧げ、右眇左顧、奇を攬り勝を頌し、大李將軍の圖中を行く、川井村を過ぐれば則ち山舒く水緩かにして郭熙の平遠圖を爲す、新宮城を雲間に望む、其下帆檣林立す、須叟にして津口に抵る、巴潭より、此に至る九里八丁半日ならざるに達せり、岸に上れば日纔かに午を過ぐ、逆旅に飲し、往いて神廟に謁す、壯麗なること本宮に譲らず、門を出で、左右數折、街里城郭の間を渉ること里許り、飛鳥の宮に詣づ、宮中に一小祠有り、徐福を祀る、宮の東南田畝の間に一碑有り、秦徐福墓の四大字を鐫る、蓋し近世建つる所、古來談ずる者熊野三山を以て蓬萊三山と爲す、遂に徐福を築くに至るか、但し海内蓬

萊と稱する者一に非ず、富士、熱田、嚴島

三日早渡津五里餘抵有馬村、遇一層崑、
高十數丈、循巖而行得一華表而入、有石
遮欄、爲伊弉册尊陵、號曰花窟、其前有
軻愚突智命墓、曰王子窟、案日本書記謂
册尊生火神軻愚突智命被灼而崩、葬於紀
伊國熊野有馬村土俗歲時以花祭、此其所
以號花窟也、窟在崑根、巖面髑髏作皴、
其巔成奇狀、如怒猊掀吻、其東側面、石
韋被之翠蓐、可愛、蓋太古諸尊皆住天上、
至諾册二尊、生國土、遂降居焉、在人間、
陵墓、實以此爲始、萬古遺跡如神在、肅

然致敬而去此間地勢陡入洋、海高浪蹴沙

と熊野を併せて四所と爲す、就中、熊野は
較據るところ有りと爲す、案ずるに元の吳
萊に客の熊野徐市廟を話すを聴くの七言古
詩あり、其首めに云ふ、大瀛海岸古紀州、
山石萬仞海流を挿む、徐市仙を求めて乃死
を得、紫芝老いて盡き人をして愁ひしむと
淵顛集に見ゆ、我が明德の中、僧絶海明に
入り、大詔に謁す、大詔問ふに、徐福の事
を以てす、海、對ふるに詩を以てして曰
く、熊野峯前徐福の祠、滿山藥草雨餘に肥
ゆ、祇今海上波濤穩かなり萬里好風須らく
早歸るべし、大詔和を賜ふ云々と、焦堅稿
に見ゆ、此れに據れば則ち徐福の祠ある亦
已に久し

三日早に津を渡り、五里にして有馬村に抵
る、一層巖遇ふ、高さ數十丈、巖に循いて
行き、一華表を得て入る、石遮欄有り伊弉
册尊の陵と爲す號して花の窟と曰ふ、其前
に軻愚突智命の墓有り、王子窟と曰ふ、案
ずるに日本書記に謂ふ、册尊火の神軻愚突
命を生み、灼かれて崩ず、紀伊國熊野有馬
村に葬ると、土俗祭時花を以て祭る、此れ
花の窟と號する所以也、窟は岩根に在り、
巖面髑髏皴を作す、其巔きは奇狀を成し、
怒猊の吻を掀ぐるが如し、其東の側面は石

章之れに被り、翠蒨愛す可し、蓋し大古の諸尊は皆天上に住す、諾冊二尊に至りて國土
滋至過者往々爲浪所卷去云、數町爲木本驛、驛吏迎入其家午飢焉、晚宿新鹿里

四日、經狼阪及太郎次郎二嶺、並險峻、余屢下輿、息舁夫肩、有婦人充役、頭戴行李、口含烟管卷木葉爲之、熊中山民皆然、邊地陋俗可概知、至曾根里、大里正西川愛助等、迎餐於旗亭一醉買舟、渡裏海里許、達三木里、陸行踰八鬼山、山掠人面起疊石作阪、如梯青天、人言熊野險路以雲鳥八鬼爲最、信然過矢濱、望海口、數石筍植立波間、山如張吻欲吞、亦爲奇景、沿灣至尾鷲宿焉

五日昧爽、有常先辭去、促程還松阪、余亦繼發經古本船津等村、踰嶺凡七每過一嶺、輒得一灣巖嶸島嶼、灣異趣、州中凡を生み遂に降りて居る、人間に陵墓あるは實に此を以つて始めと爲す、萬古の遺跡、神在すが如し、肅然致敬して去る、此間地勢陡に海岸に入り、高浪沙溼を蹴て至る、過ぐる者往々浪の卷く所と爲り去ると云ふ、數町にして木之本驛と爲す、驛吏迎へて其家に入る、午飢す、晚れて新鹿の里に宿す

四日、狼阪及太郎次郎の二嶺を經、並びに險峻なり、余屢々輿を下りて、舁夫の肩を息む、婦人あり役を充つ、頭に行李を戴き、口に烟管を含む、管は木葉を卷きて之を爲る、熊中の山民皆然り、邊地の陋俗概ね知るべし、曾根の里に至る、大里正西川愛助等、迎へて旗亭に餐す、一醉して舟を買ひ、裏海を渡る里許りにして三木里に達す、陸行して八鬼山を踰ゆ、山は人面を掠めて起る、疊石阪を作し青天に梯するが如し、人言ふ熊野の險路は雲鳥八鬼を以つて最と爲すと、信に然り、矢の濱を過ぎて、海口を望むに、數石筍は波間に植立し、山は吻を張りて吞まんと欲するが如く、亦奇景たり、灣に沿ひて尾鷲に至り宿せり

五日味爽、有常先づ辭して去り、程を促して松阪に還る、余も亦繼いで發す、古本、

船津等の村を経て、嶺を踰ゆる凡七、一嶺

有九十九灣、嶺亦如之、路之險、境之奇可知矣、三浦古里之間洋中見火輪船、黒烟衝空、望尾鷲灣馳、不知爲何國舟晚宿長嶋

六日、早踰二郷嶺、入伊勢、至野尻謁瀧原宮、有巨杉數百株、森鬱蔽天、白日爲昏、渡宮川、川出州西大臺山、山上有大浸、西流爲芳野川、南流爲熊野川、東流即爲此川、並長三四十里、過三瀬北畑黃門具教故墟在焉、憶北畑氏以忠臣之裔、奕世顯赫、至黃門、遭時不濟俄取殘滅、爲之悽然晚宿栗生村

有常來迎到其蘆見其母妻謝有常護行之勞、且賀其行無恙痛飲至夜作還家之想

を過ぐに毎に、輒ち一灣を得、巖嶸(崖)島嶼、灣毎に趣を異にす、州中凡有九十九灣あり、嶺亦之に如く陸の險、境の奇知る可し、三浦、古里の間、洋中に火輪の船を見る黒烟空を衝き、尾鷲灣を望んで馳す、何國の舟たるやを知らず、晩に長嶋に宿す

六日早に二郷の嶺を踰へて伊勢に入る、野尾に至り瀧原の宮に謁す、巨杉數百株有り、森鬱として天を蔽ふ、白日爲に昏し宮川を渡る、川は州西大台山に出づ、山上に大浸(大澤)あり、西流して芳野川と爲り、南流して熊野川と爲り、東流して即ち此川と爲る、並びに長さ三四十里なり、三瀬を過ぐ北畑黃門具教の故墟在り、憶ふに北畑氏は忠臣の裔を以て、奕世顯赫たり黃門に至りて、時の濟らざるに遭ひ俄かに殘滅を取る、之れが爲に悽然たり、晩に栗生村に宿る

七日經橿原至相可午飫於里正米倉氏、可射和大林五一及社司某等携具從松坂來迎過前部田導入大里正石井氏別業、竹樹幽邃、有茶寮面郊眺望亦佳、憩飲移時、莊應不讓辟疆園余亦學王子猷不見主人而去、

七日、橿原を経て、相可に至る、里正米倉氏に午飫す、射和を過ぐ、大林五一及社司某等、具を携へて松阪より來り迎ふ、前部田を過ぎ、導かれて大里正石井氏の別業に入る、竹樹幽邃なり、茶寮ありて郊に面す、

眺望亦佳なり憩飲時を移す、莊は應に辟疆の園に譲らざるべし、余亦王子猷を學び、主人に見へずして去る、有常來り迎へて其

八日辞有常氏還至雲津、兒格孫熙及門生僕隸輩陸續來迎、憩於高茶屋、薄暮歸入山莊
此行從吾勢經和州至紀府、五十里而近、從紀府經熊野至吾勢百里而遙、紀之歟勢、邊疆相接、爲隣邦然地偏僻、而路險遠、從前吾藩之士無作熊野游者、游從吾黨始余安得不記耶

蘆に到り、其母妻を見て、有常護行の勞を謝し、且其行の恙無きを賀す、痛飲して夜に至り、家に還るの想を作す

八日、有常氏を辭し、還りて雲津に至る兒格孫熙及門生僕隸輩、陸續として來り迎ふ、高茶屋に憩ひ、薄暮還りて山莊に入る、此行吾が勢より、和州を経て紀府に至る、五十里にして近し、紀府より熊野を経て、吾が勢に至る、百里にして遙かなり、紀の勢と邊疆相接して隣邦爲り、然も地は偏僻にして路は險遠なり、從前吾が藩の士、熊野之游を作す者無し、游は吾黨より始、余安ぞ記せざるを得ん耶

妹脊山

儼然相對共凝妝、山有雌雄碧水傍、謠俗

度高見嶺々在國見岳北爲勢和之界
神武帝入和州蓋由此嶺云

東西正相似、小姑千歲嫁彭郎、歐陽公歸田錄
江南有大小孤

天孫神且武、群雄從使令、西州已平定、
東面討不庭、蠱爾長臚彥、抗天勢暴橫、
憑據孔阪險、毒箭殞皇兄、天孫曰噫嘻、向
日功難成、我實日神裔、唯當背日征、繞
紀轉向勢、神風送旆旌、高見與國見、兩

山而世俗轉孤爲姑江側有一石磯謂之澎浪磯遂爲
彭郎云彭郎小姑婿也東坡詩舟中賈客莫漫狂小姑
前年嫁
彭郎

山共崢嶸、大石壓累卵、何適不摧崩
神風大石等語

和歌山

歌神有廟自風流、碧水紅橋繫桂舟、鐘鳴
韃食戶將萬、亦是東南磊落州、

並見御
製中
梟師皆授首、巨魁巢窟傾、中土乃

小浦來青後園雅集

卜宅、皇威震八紘、歷世已踰百、率土奉
王正、我行經此嶺、俯仰感中情、杞人休
憂慮、儼然在天靈、

同坐春風裡、詩酒轉相親、識面有新舊、
論心無主賓、迎人花笑立、呼友鳥來馴、
何異鄉園集、天涯作比隣、

過龍門里々在大和國宇陀郡常磐抱
牛若避難處

謁久埜大夫席上賦呈

滿天飛雪暗荒村、懷裡孤雛泣凍暄、他日
嶄然見頭角、始知此地是龍門

經文緯武氣堂々、大厦安危憑練梁、木國
豈唯有喬木、鬱然身繫萬民望、

紀川舟中望高埜山

中流停棹揭輕篷、遙揖東林弔遠公、彭髯
如聞三實鳥、雨餘蒼翠落杯中、

紀三井寺留別松平春峯倉田伯成

碧水丹山却斷腸、旗亭別酒暫飛觴、他時
何但憶佳境、更望美人天一方、

宿湯淺古碧樓故人菊池士固會詩友處
故人詩中識此樓、樓如舊識晚興留、海波
激灩一簾月、每伴故人詩酒游、

士固招飲

契濶十年心未灰、訪君遙到碧山隈、素封
千戶木奴富、南面百城芸卷堆、花下同歎
頭白盡、樽前相見眼青開、猶餘湖海豪風
在、醉拔寶刀驚坐來、

道成寺

蕭寺千年據峻岡、埋沙歛瓦色猶蒼、春風
好在老櫻樹、花撲客表吹古香、

江川瀨見善水兄弟邀余宴集
庭櫻正屬艷陽辰、花映青樽酒幾巡、更
々棣嶸美、歡然共作一家春、

湯崎

一名鉛山祇南海有鉛山七境
詩如銀沙步金液泉皆其一也

銀沙金液好詩料、芝石龍嵒好畫材、天意
適降祇伯玉、彩毫寵貴勝區來、

安居谷題並木氏壁

平生敦好只詩書、盃酒相邀耕讀餘、凡化
自成里仁美、何慙此地稱安居、

一部洞門
巖當路表仙關、中有洞天通往還、織女
雲車指征路、浮空紫翠是三山、

橋柱浦

天鍾靈氣在南維、石多於人怪且奇、非是
狡獪非是戲、終古屹然立不移、石亦有心
惡瀾狂、中流刀作砥柱障、石又有心憂天
墜、上帝任作柱石寄、君不聞大古天地洪
荒初、採鍊曾遭女媧須、功成高拱補天手、
餘力來鎮炎海隅

游古座川

攢峯峭壁迎還送、曲岸廻流窮復通、左眄
右看忙應接、舟行摩詰畫詩中、

藍瀨巨巖

峻壁捕天奇更奇、奧區自少世人知、若將
此石此人物、莘野渭濱耕鉤時、

那智山瀑布

匡廬水簾曾耳聞、那智瀑布今日擊、貴耳
賤目我豈敢、我挾我目懸翠壁、翠壁丹霞
縹渺間、天傾河漢濯孱顏、奇態橫出難盡
寫、頻手頻必不暫閑、有如虹懸蛟龍挂、
激雷劈山驟雨快、落絮飄凡雪漲空、帝唾
飛珠僊墜珮、旭日射之光陸離、又現美人

窈窕姿、吾畜兩眼六十歲、平生未見如此奇、名勝亦自有等位、論品不甘居第二山有富士湖琵琶、瀑是那智可相比、嗚呼今日人中誰是龍、雲將何處去相從、且看天下無雙瀑一洗平生芥蒂胸、

踰雲鳥山

雲間縹渺上崔嵬、鳥道凌空人馬哀、誰識武侯雲鳥陣崢嶸化作此山來、

下九里峽

輕舟如箭下清川、峯去巒來枕席前、坐閱橫披山水卷、瞥然過眼幾雲烟、

題徐福祠

神山託跡有餘榮、憶起當初航大瀛、萬里來投君子國、一塵願作聖人氓、靈芝仙藥豈殊種、蓬島桃源非異情、同避狂秦君更遠、鳥能擇木眼分明、

有馬花窟

伊弉册尊陵也

怪石表靈窟、園陵鎮大荒瓊矛探國土、天柱判陰陽、神裔長垂統、夷酋敢犯疆、野花薦時祭、遺德萬春香、

熊埜道中雜詩

埔頭日夜望郎還、起倚欄干飯熟前、烟霧

冥濠天未曙、白帆隱見蜜柑船、善男善女幾雙々、不拜神祠拜佛幢、唱讚滿堂聲似湧、筆山睿製入村腔、木葉吹烟代銅管、鶉衣蔽體代羅襦、可憐貧婦亦充役、險路荷擔代驛夫、到處樹梢羅網懸、家々衣食在漁船、平時却有滄桑變、萬頃烟波即是田、一隻鯨魚潤七鄉、漁夫誇獲氣揚々、窮冬亦已作正月、醉舞酣歌人欲狂、漁卿有大獲輒置酒會飲呼爲

正月

烟水霞峰半月程、吟輿簾捲賞春晴、老夫憑仗壯夫力、狼阪鬼山安坐行、柳色青青花氣香、春風處々酒帘揚、樊川詩境身經歷、千里鶯啼送到鄉、

あとがき

一、「南遊志」の著者斎藤拙堂氏は藤堂藩士で、萬延元（一八六〇）年三月四日に津を出発し、紀伊半島を一周した紀行文である。

一、原文は漢文で、既に国立国会図書館デジタルライブラリーに公開されている。また昭和二十四年刊行井上豊太郎氏の「詳細紀伊郷土文献拾遺」にも読み下し文付で記載されているが、今回添付の読み下し文は昭和十一年庄司海村氏著「南遊志」より転写した。

一、道成寺の欄で、江川組大庄屋瀬見善水と、小池家に養子に行った弟小池甚七の名が見える。また善水及び子弟は和歌を能くし、都人の風ありと評している。

一、三浦、古浦の間、尾鷲湾を望んで洋中に、火輪の黒烟を衝く船を見るとある。萬延元（一八六〇）年と云えば桜田門外で井伊直弼が暗殺された年なのだ。

平成二十二（二〇一〇）年十二月三十日（木）年末寒波の日

清水章博

